

Title	「労働」と観光が融合したボランティアツーリズムに関する研究
Author(s)	中村, 憲司; 松本, 秀人; 敷田, 麻実
Citation	日本観光研究学会全国大会学術論文集, 23: 425-428
Issue Date	2008-11
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/16811
Rights	本著作物は日本観光研究学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Institute of Tourism Research. Copyright (C) 2008 日本観光研究学会. 中村憲司, 松本秀人, 敷田麻実, 第23回日本観光研究学会全国大会学術論文集, 2008, pp.425-428.
Description	

「労働」と観光が融合したボランティアツーリズムに関する研究

Volunteer Tourism: Integration of Work and Tourism

中村 憲司* 松本 秀人* 敷田 麻実**

NAKAMURA Kenji MATSUMOTO Hideto SHIKIDA Asami

本研究では、労働と観光が融合したものと考えられるボランティアツーリズムの類似例を挙げ、これまでとは異なる視点からの概念構築を試みた。ボランティアツーリズムは参加者の自己実現欲求を満たし、受け入れ地域側に経済効果以外のものをもたらす可能性がある。この観光形態には、これまでの観光とは違った効果をもたらす可能性が考えられる。労働と余暇活動の両方の要素を備えるボランティア、それと観光が組み合わせられたものとして注目することで、これまでの「ボランティアツーリズム」に新しい視座を与える。

キーワード：ボランティア、労働、体験観光、自己実現

1. はじめに

マストツーリズムによって観光地の文化や自然が損なわれることが問題視されるようになると、それに代わるものとして「持続可能な観光」という概念が提唱され、エコツーリズムなどが登場してきた。これに続いて、最近では自律的観光、体験型観光など新たな観光のあり方にも関心が集まっている¹⁾。これらの新しい観光には様々なものがあるが、労働と観光という一見異なった要素が含まれている「ボランティアツーリズム」と呼ばれる形態も生まれている。

一般に、労働と余暇活動の一部である観光は相反するものと考えられているが、ボランティア活動のように、余暇活動に労働が含まれる事例も存在する。この場合、その2つの要素が単純に結びついているだけでなく、「融合」して別の形態になっていると考えることができる。さらにそこに、観光という「非日常空間での活動」という行為が加わったのがボランティアツーリズムである。

このような前提に立てば、ボランティアツーリズムは極めて今日的なテーマである。しかし、これまでボランティアツーリズムについての研究は十分ではなく、NGOによる開発援助などのボランティア活動に、オルタナティブツーリズムの諸要素と共通する部分があるという指摘に留まっていた。そこでこうした観光を研究することで、今後の観光と労働の関係を探ることができると考えられる。

2. 研究の目的

これまでのボランティアツーリズムに関する研究は、観光の視点からなされたものが少なく、その可能性や意義についても、詳細な考察がなされていない。本研究では、社会学、心理学、開発援助などにおける先行研究をレビューし、文献及び資料調査を行う。

はじめにボランティアツーリズムの類似例を収集、整理した上で、ボランティアツーリズムを労働と観光という視点で考察した。また、楽しみながら自己実現を図れるという特徴にも触れ、社会においてボランティアツーリズムの持つ意義を示した。

3. 労働と観光の融合事例

観光は余暇活動に属するものである一方、ボランティアは労働と余暇活動の両方の要素を含んだ活動である。その構造が複雑になっているだけでなく、ボランティアとしての重要性が強調されてきたため、観光の要素が取り入れられることがなかったものと考えられる。

観光は余暇活動の一種だが、余暇は労働に対する自由時間と捉えられる。したがって観光と労働は相容れないものと考えられてきた。ところが、実際の観光現場では、広義の「労働」が観光の重要な要素となっている事例も多く見られる。そこで以下では、労働と観光が何らかの関わりを持って融合している事例を整理

*北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院 観光創造専攻 修士課程

**北海道大学大学院 観光学高等研究センター

する。

①「体験」を目的とするもの

農村などでの生活や農作業を体験するグリーンツーリズム、雪国で雪を屋根から下ろす作業を体験する雪下ろしツアー、木々が伐採された場所に木を植える植林ツアーなどの、「体験型観光」がこの例である。これらにおいては、労働体験が主たる目的となる。その労働は結果的に地域のためになるとはいえ、参加者は地域貢献よりも労働体験から満足感を得る。一方、参加者が生産した農産物や、雪下ろしによる家屋倒壊防止、森林再生につながる樹木などは地域側に利益が生ずる。しかし、こうした「体験型観光」はあくまで「体験」であり、他者のための労働という意識が低く、社会に貢献している自分に満足するという充足感は低い。

②報酬を得ることが目的であるもの

これに分類されるものとしては、ワーキングホリデー、小笠原などのバイトアンドレジャーやリゾートアルバイトなどが挙げられる。ワーキングホリデーは海外の滞在に必要な費用を現地で調達しながら観光するものであり、リゾートアルバイトは文字通り観光地でアルバイトするというものである。また、イギリスやオーストラリアではプレースメントという形で、人材派遣会社が観光地に労働力を送るという仕組みもある²⁾。

この場合、労働と観光は確かに同じ場所で行われるが、意識としては全く別のもので両者は融合していない。また、その労働は「他者のため」という要素を含まない自分の利益のための労働であり、社会との関係は弱い。

③労働力を提供することで、自己充足感を得るもの

この形態はボランティアに最も近いが、労働力を提供することによる自己実現を参加者が重視していることが特徴である。例えば、有機農業を営む農家で労働力を提供し無料で滞在する WWOOF (Willing Workers On Organic Farm) は、農家で働きたいという意欲のある個人(WWOOFer)と、働き手を受け入れたいというホスト農家をつなぐシステムである。このシステムでは、WWOOFer は滞在先の農家で1日6時間労働し、その対価として宿泊と食事が無料で提供される³⁾。

この形態に共通する要素として、ボランティア活動

と同様に、自己実現機会が求められていることがうかがわれるが、それが移動(旅行)先という非日常空間で行われることに特徴がある。また、受け入れ側にも労働力の確保は第一義的な目的ではない。

④労働体験による対価が還元されるもの

果物狩りツアーなどでは、本来なら単に対価を払って果物を購入すればよいところを、わざわざ果物を採るという体験をする。体験を楽しむという点で観光と考えられる。この体験も広義の労働であるが、ここでは労働に対する報酬は特になく、労働の対価として収穫した果物が観光者に還元されるだけである。収穫体験というものを果樹園経営者から買うという構図になり、社会との関係における自己実現性はほとんどない。

⑤労働を主たる目的とするもの

NGOの開発援助活動や、会社員の出張など⁴⁾は他の地域に働きに行くことを目的としている。必ずしも地域のためになっているとは限らず、体験として楽しむことも目的に含まれていない。出張などでは、地域性ある仕事に携わることも少ない。これらは労働の一部として捉えられる。

以上、労働と観光の関係性、労働の成果の帰着先、及び自己実現に着目して、ボランティアツーリズムの類似例を考察した。

上記のうち、労働と観光が分離している顕著な例が②や⑤である。それに対して労働と観光が融合したものが①、③、④である。①では体験自体を目的としており、④は体験を楽しむことと同時に、その成果を得ることも目的としている。③が労働という色彩が強い点、またそこに自己実現性が伴っている点から、③がボランティアツーリズムにもっとも近いものと考えられる。

4. ボランティアツーリズムとは

前節では、労働と観光が結びついている事例を挙げた。これらは産業の近代化以降分離した労働と余暇の境界が曖昧になっていることを示すものである。次に、分離した労働と余暇、ボランティアとは何か認識したうえでボランティアツーリズムを考える。

(1) ボランティアと観光

労働と余暇は、産業の近代化によって分離されたと

考えられてきた⁴⁾。労働とは、「人間が自らの生存を維持し豊か化させていくために、意識的に自然界に働きかけて有用な価値を形成する基本的な営為」⁵⁾である。それに対し余暇とは、「睡眠などの生活必需時間や仕事などの拘束時間以外の自由時間、またはこの自由時間における諸活動の総体」をいう⁶⁾。余暇は、社会から離れて、自由な活動をすることで自己実現を図り、再度労働に打ち込めるようにする時間とされてきた。

この労働と余暇の両方の要素を持つものがボランティアである。ボランティアは、完全に私的なものから公的なものと、形態は多様だが、入江は「自発性・無償性・公益性²⁾などをそなえた行為」としている⁷⁾。言い換えれば、自発的な行為が社会に役立つことがポイントだが、それが自己実現につながることも重要な要素である。こうした自己実現や社会参加は、ボランティアに限らず、労働にも見られていいはずだが、それが見出しにくくなっている現状がある。

また鷺田は、現在では「労働」と「余暇」の概念的な対比が無意味と感じられることが多くなってきていると論じている⁸⁾。鷺田によると、「会社での労働よりも無償のヴォランティアのほうが、かつての仕事のイメージにより近くなっている」という⁹⁾。これは自発的に社会奉仕することで生きがいを感じることができ、自己実現につながっているからであろう。

一方、観光とは「自由時間における日常生活圏外への移動をともなった生活の変化に対する欲求から生ずる一連の行動」である¹⁰⁾。観光は多様な分野の産業に大きな経済効果をもたらすもの、交流人口の増大を促すものとして期待されている¹¹⁾。逆に観光も、社会システムに影響され変化してきた¹²⁾。20世紀後半には、観光の大衆化によってマスツーリズムが現れ、現在はそれに代わるものとして多様な観光が現れている。ボランティアツーリズムも、「今までの観光」にないものを期待されて生み出されてきた社会現象と考えることができる、新たな観光の一形態と考えられる。

(2) これまでのボランティアツーリズムの定義

Wearing は、ボランティアツーリズムを、「自由時間においてさまざまな動機に基づき、社会における物的貧困の緩和、援助、また特定の環境の保護や社会や環境の調査などの組織化されたボランティア活動」と定義している¹³⁾。他には、ボランティアツーリズムとは、サポーターリングツーリズムと呼ばれるもの、つまり貧

困や飢餓など、その地域の問題改善に積極的に関わった観光の別称であるという¹⁴⁾。

いずれもボランティアや開発援助という視点でボランティアツーリズムを捉えており、労働と観光という視点からは考察はされていない。また、そこから見出せる社会との関わりにおける自己実現という要素が重視されてこなかった。

(3) 労働と観光が融合したものと捉えたボランティアツーリズム

Stebbins らがこれまでに示してきたボランティアツーリズムの定義¹⁵⁾には、観光の要素の一つである移動という概念が含まれていない。これまでの定義では、ボランティアとボランティアツーリズムが同一視されていた。

これらを踏まえ、本研究ではボランティアツーリズムを、「自由時間における、さまざまな動機に基づいた、生活圏外においての、社会の諸問題の解決や援助などに貢献する自己実現性ある労働を目的とする観光」と定義する。

例えば、WWOOF では余暇活動として農家での体験を楽しむと同時に、農家に労働力を提供する。そこには、農業支援という社会的意義が見出せる。海外の開発援助などを例とするボランティアでは、関係性を見る社会が異なっていた。しかし、今後は国内にも目を向けるボランティアツーリズムが出てきている。

5. 社会背景と現代社会におけるボランティアツーリズムの意義

(1) 参加者の労働観の変革

社会参加という意味もあるが、人は生活するために労働をしなければならない。しかし社会では、雇用機会の減少、賃金の低下によるワーキングプアの増加など、労働問題が山積している¹⁶⁾。さらに、IT化の進行や機械化などによって、誰のために・何のために働くのかが不透明になり、働くことに生きがいを見出しにくくなっている¹⁷⁾。非正規雇用を選択する若物、フリーター増加の傾向は、「なぜ働くのか」という問題の答えが見出しにくくなっているということのひとつの証拠であろう¹⁸⁾。

今日では働くことそのものに意味を見つけにくくなってしまったため、人々は労働とは別のところに生きがいを求めるようになる。過去には、ジョン・ラスキ

ンらが、産業化によって無意味化した労働を嘆き、芸術によって「労働の質」を高めるべきだという議論をしたが¹⁹⁾、現実にはこうした思想が存在感を残しているとは考えにくい。労働の質の低下、生きがいの欠如から、余暇における活動として、また社会参加への一つのかたちとしてのボランティアが重要視される。

ボランティアには、自己実現などの、観光の持つ楽しみなどと異なる効果が認められる。また、参加したのちに、参加者の労働観や社会参加に対する考え方にプラスの影響をもたらすという研究があるが、McGehee、Santos らはこの効果がボランティアツーリズムにもあり、社会運動などへの参加度が向上し社会変化へつながるであろうと論じている²⁰⁾。

(2) 他の観光とは異なる地域活性化への役割

少子高齢化や過疎化などによって、地方は定住人口の減少、地域経済の停滞など厳しい現実に直面している。こうした状況を改善する方法のひとつとして観光があり、観光による「まちづくり」を実施している地域も多く見られる。そうした事例において観光に期待されているのは、主として経済波及効果や交流人口の拡大といったものである。しかし、ボランティアツーリズムは、違った形で地域を活性化させることができる可能性がある。

NGOなどが実施している開発援助プログラムは、発展途上国を対象とし、その地域にないものや技術を提供することで現地の人々の生活の質を上げようとしている。足りないものがあるのは国内の過疎地域なども同じである。ボランティアツーリズムは、たとえば過疎化が進む地域に必要な労働力をもたらす、かつ参加者は人の役に立つことを感じて充足感を得ることができる。何を求めているのかを地域が発信し、それに自発的に答えようとする人がいれば、ボランティアツーリズムを通じてその地域社会の問題解決ができる可能性がある。

6 まとめ

本研究ではボランティアツーリズムの類似例を挙げ、これまでとは違う視点から考察した。これまで、主として開発援助という視点で研究されてきた分野を、労働と観光という視点で捉え直した。また、ボランティアツーリズムが持つ、社会と関連する自己実現という要素にも重要性があることを示した。ボランティアツ

ーリズムにおける自己実現に関する心理的作用、また旅行者や地域など各関係者の視点から見たボランティアツーリズムなどの考察などは今後の課題としたい。

【補注】

- (1) World Tourism Organization の定義では、ビジネスなどの商用旅行も旅行に含めている。
- (2) 無償か有償かに関しては議論が分かれる。最近では有償のボランティアも増えてきている。

【参考文献】

- 1) 前田勇 (1998) : 現代観光学キーワード辞典, 学文社, pp. 63-98.
- 2) Collins, V. R. (1999): *Working in Tourism, Vacation Work*, pp.12-118.
- 3) WWOOF Japan ホームページ. <http://www.wwoofofjapan.com/main/index.php?lang=ja> (Downloaded at 2008/10/10)
- 4) 佐々木土師二 (2007) : 観光旅行の心理学, 北大路出版, pp1-43.
- 5) 濱島明、竹内郁朗、石川晃弘 (2005) : 社会学小事典, 有斐閣, p. 633.
- 6) 貝塚啓明ほか (1996) : 日本経済事典, 日本経済新聞社, p. 967.
- 7) 内海成治、入江幸男、水野義之 (1999) : ボランティア学を学ぶ人のために, 世界思想社, pp. 4-10.
- 8) 鷺田清一 (1996) : 誰のための仕事 労働と余暇を超えて, 岩波書店, p. 4, 5.
- 9) 鷺田 (1996) : 前掲書, p. 4, 5.
- 10) 長谷 (2006) : 観光学辞典, 同文館出版, p. 1.
- 11) 前田勇 (1998) : 前掲書, pp. 63-98.
- 12) 佐々木 (2007) : 前掲書, pp. 1-43.
- 13) Wearing, L.S. (2001): *Volunteer Tourism: Seeking Experiences that Make a Difference*. CAB International. 1p.
- 14) 長谷 (2006) : 前掲書, p. 9.
- 15) Stebbins, R. A., Graham, M. (2004): *Volunteering as Leisure Leisure as Volunteering*, CABI Publishing. pp.1-30. 209-224.
- 16) 本田由紀 (2008) : 軌む社会 教育・仕事・若者の現在, 双風社, 255p.
- 17) 中川清 (2007) : 現代の生活問題, 放送大学教育振興会, P. 221.
- 18) 中川 (2007) : 前掲書, p. 221.
- 19) ジョン・ラスキン, 神田豊徳訳 (1932) : 世界第思想全集 62 ヴェニスの石 (下), 春秋社, pp. 40-122.
- 20) McGehee, N.G., Santos, C. A. (2004): Social Change, Discourse and Volunteer Tourism, *Annals of Tourism Research*, Vol.3, No. 3, pp.760-779.